
その声

みなどりとうや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その声

【著者】

Z633390

【作者名】

みなぎつとひや

【あらすじ】

「パブリ併載」魂が宿る物・者たち一切の声を聞き、話すことができる青年が経験する出会いと別れの物語

*

「そう言えれば、一いちちゃん、あんたの名前を聞いてなかつたな」

「俺は吉岡良一。何だつけ、五条藍白祥絵之左エ門？　あんたほど複雑怪奇な名前じゃないよ」

「まあそつだひつと。俺はお国さんか認める宝物だ、格上つてもんだ」

好きになれないけどね、と吉岡は思つた。

「それじゃ、こいつがまた出会えたら」

「そうだな。俺はしばらくな生きりれるりじこから、また来てくれ。俺と声が通じて話が出来る相手など、ここ何百年で一人いただけでそつそつこないからなあ、待つてこるからなあ」

吉岡が、今まで話しかけていたその国宝指定の水差しに向か、小さく手を振る動作をすると、角に立つてこた警備員が吉岡に近寄ってきた。

吉岡もこつものじとくその気配に気づき、毎度のことながらと、そそくさとその場を立ち去つた。

「ノーラージアムの外に出ると、吉岡は大きくひとつ伸びました。//

「あー……やつらの青絵の水差し、何でアレで国宝なんだろつたなあ。

あんな傲慢な奴の、どこがいいんだか

芝生の方へと歩いていくと、吉岡の足下に、雀と鳥が舞い降りた。

吉岡は、また陳情か、とため息をついた。

「話が出来るというのは、あなたですか

「俺と話をしてください！ 近頃の人間、ひどいんですよ！ 俺たちのクチバシを、金と交換したりするんだ！」

吉岡の前で鳥が大きな声で鳴いた。吉岡はその場にかがんで、

「カラス君、君の本当の名は聞かないよ。君らは人間に長い間かけて迷惑をかけすぎたんだ。だから人間は、君らを追い払う為に狩人を募集して、その狩りの証拠にクチバシを持つてこさせてるんだ。君らのクチバシに価値がある訳じゃない、缶ジューース一本にさえならない。それにまた、狩られるのは君自身に罪があるわけでもない。仕方ないことなんだよ」

と言つた。鳥は、

「俺たちの仲間のせいなんですか、本当に」

カアーとしか響かない鳴き声だが、吉岡の耳には必死の訴えが聞こえていた。

「うーん……人間が作つてる作物を食べたりとか、あと赤いビニールやグレーのビニールに入つたものを、破つて漁る仲間なんか、いなかい」

「います、いますよ。美味しい匂いがするんですよあの中から」

「君もその口か。それは人間が出した生ゴミだよ。ゴミを散らかす

輩が疎んじられるのは、君も分かるだろ？」

「ゴミ、なんですか？ 美味しいですよ、ハズレもありますけど」「当たりだらうがハズレだらうが、人間の目から見ると、『ゴミを散らかす害鳥なんだよ、カラス君、きみたちは』

鳥が少しうつむいて地面をつけばむ。

「さあ、僕の元にあれこれやつかい事を持つてこないでくれ、そこ
の雀も、どこで噂を聞きつけてきたか知らないが、人間と動物の間
に立つてのものめ事仲裁なんていい加減うんざりしてるとんだ。金輪際
来ないよう、君の仲間たちにも伝えてくれ、頼んだよ」

雀は、媚びるよう跳ねて吉岡に近づいたが、吉岡は手でそれを
払う仕草で応えた。

一羽の鳥が同時に羽を広げ、沈み始めた太陽の方角へと飛んでい
つた。

「傲慢な国宝に、どこで話を聞きつけたか分からぬ鳥か。今日は
ついてないな」

吉岡は飛んでいく鳥たちを田で追いつつ、ズボンのポケットに手
を突っ込んで階段を降りていった。

*

「じゃあ大戦当時でも生き残れる自信があつたの？」

吉岡はがつしきとした将棋盤に手を置き、独り言、といふよりもはつきりと言葉を出した。

「儂くらこになると、いつ死ぬか死なんかくらこは、まあ何とかくだが分かるもんだわなあ。人間の年月で言えば、あと十二年と二ヶ月少々、つてところじやろ。お前さんの息子が、儂で遊んでくれれば本望なんだがなあ」

「まだ結婚もしていない俺に言われてもなあ」

手を離し、布巾を取ると将棋盤を拭く。

「ああ、いい気分いい気分。誰も気にすらかけてくれんで朽ち果てるのだろうと思つていたからなあ、まさか吉岡の血こ、『耳』が出るとは思つてもみなかつたでの」

「耳、ねえ。喋る相手も出来るから、口、でもいいようなもんだよな」

「はは、まあ、耳、は通称だから変えようもないて。それより大学は良いのか？ 先々週に蔵の扉が開いた折りに、課題の提出が云々と言つておつたように思つたが」

「もつとつくに提出したさ。じいちゃんの時代と違つて、今の大学は就職のための通過点みたいなもんだからな、学士様、なんて価値もないのさ、卒業したつて」

「ほほおう。学士号の価値すらも、時代で変わるものか。誰も儂を挟んで将棋を指して談義などしてくれなんだで、外の価値観がもう掴めんよくなつてしまつたわ」

「ま、外は外でぐちゃぐちゃさ。蔵の中で余生を過ごす方が幸せだと思つよ、いつも言つてるけどさ」

「ワシヤ将棋盤だでの、将棋指してもうひとつ本望なのだがなあ。お前は将棋のしの字も学ぼうとせんし」

「昔、親父と俺で指したの、覚えてないのか？ 呆けたかジイサン」

「ああ、あの事はもう言わんとくれ、お前もちくちくと性格悪いのう」

「う

「はは、じめんよ。それ、綺麗になった」

足まで拭われた将棋盤は、いつそ艶を増したようであった。

「助かるの。風呂、とこつものに人間は浸かる、と昔聞いたが、こんな感じか？」

「風呂？ ああ、すつきりするから、似てんじやないかな。湯の中に浸かたり石鹼で体を拭たりするから、残照さん、木製将棋盤のあなたには、無理だぜ風呂」

「久しぶりに儂を名前で呼んでくれたなあ、嬉しいことこの上ないのう」

「シヤの出た姿見たら、ついね。ま、それじゃ定期クリーニングはこの位で。またそのうち来るから」

「おひおひ、無理はせんええでの」

昔ながらの土蔵の扉を締め、吉岡は家の玄関を開けた。

「あら、今日は早かったのね。一つだけ？」

「ああ母さん、将棋盤だけ磨いてきた」

「そう。あの将棋盤も、きっと年代物よねえ、私にはよく分からなければ」

「本人曰く江戸後期の名人の弟子の練習作らしいぜ、荒々一百年ってところだ」

父の靴を磨いていた母親と玄関口で鉢合わせた吉岡は、そんなことを話して家に上がった。

ガシガシ君買ってきてあるわよー、と玄関からの声に、吉岡は一階に上がろうとしたのをやめてキッキンに向かった。

「わい、と。台所の主に挨拶しないといつ刺されるか分かんないからな」

「相変わらずひどい言ごごさね、私は刺したりしません。私たちを使つてやつくり、ぶつさりやるのつて人間じゃない」

「「めん」「めん、悪意ないから。昨日、研いでもらつた?」

「うん、ありがとうね。他の子たちのことまで心配してくれて」

「いや別にいいさ。ミス・セイシールの頼みとあれば」

「あらやだ恥ずかしい。私なんてただの洋包丁扱いしてくれればいいのに」

「声を聞こひやつたからには、そんな訳にまいかないわ。他の子たちとは田代めそう?」

「ううん、まだ無理ね。あなたのお母さん私ばかり使うから、まだ他の子たち、田代められる域にまで相当遠いわ」

「そつ……おーい、その他」

「ちょっとお、可哀想じやないそれ。せめて包丁君たちとかつて呼んであげてよ」

「じゃ、包丁君たち。もつと使い込まれて、魂が入るところまで行き着くんだよ」

「私たちへの励ましありがとう。でもあんまり私に構つて、箸がまた嫉妬するわよ?」

「ああ、確かに。箸のみんなー、げんきかーい」

からから、ヒビヒビで鳴る。

「あの子たち、金属の私たちの」と、嫌つてゐみたいに思つただけ

「アーティストの才能を発揮するためには、アーティスト自身の才能と、アーティストの才能を発揮するための環境が両方必要です。」

「つよいぢやんはやめて、ミス。金物に当たつて傷つるのが怖いんだが、今度箸立てに金属の韓国箸でも混ぜとへよ」

「それ傑作ね」

キイインと金属が鳴る。

「さ……て、ガシガシ君は、と」

冷凍庫を開ける。ソーダ味のガシガシ君が、冷凍食品の上に無造作に置かれている。

「お楽しみタイム」

吉岡は言った。が、その手に伝わる冷たい感触の中に、吉岡は不意に熱感を感じ取った。

「はあ……また喋りたい物がいるのかよ。ガシガシ君の芯だなきつと。とりあえず」

吉岡は袋を開け、手早く青いガシガシ君を食べ尽くした。
当たり、と焼き印された芯が、手に残った。

「当たりじゃん、珍しい」

「当たりつて文字が焼かれてるんですか、僕は」

吉岡の手の中で、ガシガシ君のバーは小刻みに震えている。

「僕、他のみんなは静かなままなのに、突然首筋に熱いのを押しつけられて目を覚ましたんです」

「ショック覚醒タイプだね、お気の毒に」「気の毒なんですか、僕は」

自分で言つておいて、吉岡自身ちよつと困つた。

「まあ……もし何事も無かつたら、君は何も思うことすらなく消費されてゴミ箱行き、そこで焼かれて魂だけ天に昇つて、次の、より上位の生命体に転生出来たんだよ。心が入つてしまつたら、焼かれるのも、捨てられるのも辛くなるからね」

と、説得調で言つた。

「はあ。それで僕の体はどうなつてるんですか、何かおかしいですか」

「世にも珍しいガシガシ君の当たり棒、つちや、おかしいといつより珍品かな」

「僕はどうなるんですか、珍品つて言われても、うれしくないです」「だらう、ね……まあ、安寧に生きて朽ちていくのを望むなら、俺の保管箱の中にでも、洗つてから入つてもらつてもいい。雑多なとこだけど。もしその、なんだ、ガシガシ君の棒、つていう今の命が嫌ならば、俺は君をコンビニに持つていて命を持たない君の仲間が芯になつてているガシガシ君を受け取つて、君をコンビニに任せせる。焼却処分になるだらうね」

「これ以上熱い目に遭うのは嫌です！」

ふるふる、と棒の先が震える。

「でも君、元々は熱帯の木じゃないの？」

「ネッタイ？　よく分かりませんが……僕がもっと大きな体で生きていたときは、燐々と降り注ぐお日様の光にエネルギーをもらいな

がら、足下にある土から美味しい水を飲んで、のんびり生きてました。けれど、人間がある時、とてもやかましい音を立てる機械で僕の胴体を切りにかかったんです。痛いからやめてと叫んだけれど、最後の最後まで切られてしまう前に、僕は気を失いました

「んー。典型的な魂の気絶の瞬間、ってとこだね。目覚めるとこうまでにどうなったか、推測混じりだけど説明してあげようか」「はい、出来ればお願ひします」

ガシガシ君の棒を片手に、ダイニングソファーに背を預けると、

「君は多分、熱帯の巨木だつたんだろうね。胴体をばっさりやられたら、木は普通その瞬間に魂が抜け、宙に浮く。魂は気絶したままで。通常はその魂、月光か陽光に浄化されて天に引き戻されるらしいんだけど、時折そうでない魂がいる。それが君だ」

と吉岡は言った。

「はあ」

帰つてきた言葉に、納得の色は感じられなかつた。
しかし、とりあえず続けることにした。

「魂の事は目覚めの時まで置いとくとして、体、すなわち巨木の姿だつた君の体は、バラバラにされて色々なものになつてゐるはずだ。物を置く机や踏み台のような大きな物から、君のような小さな形まで様々に加工される。もつと小さな破片は、もう焼かれていると思うけれど」

「じゃあ僕も、もしかすると焼かれて昇天出来てたかもしぬなかつたんですね」

「そうだねえ。ここからは僕も受け売りでしかないけど、生き物が

死ぬ時、木であれば根から引きはがされた時が、よく言う『往生際』つてもんらしい。けれど、たまに往生しない、要するに浄化されて天に昇らない魂もいるんだってさ。そういう魂は、元いた体の、魂の宿つていた部分に自然引き寄せられて、憑く。でもすぐに意識が戻る訳じやないから、誰にも気づかれない。まあ元々、木々や物の魂の声を聞ける『耳』は、全世界見回してもとても少ないらしいしね』

吉岡の、わずかに誇らしげな口調も、

「はあ、そうなんですか」

と、棒にはスルーされた。

吉岡はちょっと残念そうに眉を上げると、続けた。

「ま、話し相手に巡り会えただけでも相当ラッキーだとは思うよ、君は。で、だ。魂が眠つたままその部位も焼かれて、今度こそ寄り代が無いから昇天する、なんてことの方がが多いみたいなんだけど、たまに運がいいのか悪いのか、魂が入つた部位を叩かれたり釘を打たれたり、君みたいに焼き印を押されたりして、そのショックで魂が目覚めることがあるらしい」

「それが僕なんですか」

「そうみたいだね。ところで体の、というのも変か。聞こえるとか見えるとか、そういう感覚は、以前通り全部あるかい？」

「いいえ、音は聞こえますが人間の言葉がほとんど分かりません。それに今まで感じていた光を感じません。暗いんです」

「目の部分の魂が切られて分離したかな。それは取り戻せない」

「言葉が分からるのは何ですか」

「それは人間の話してる言葉の方が違うから。俺の話す言葉は魂に話す周波数らしくて何にでも通じるけど、君がいた場所つてここか

ら遙か何千キロってところだらうからね、人間たちが使っている言葉も違うんだよ。だから聞いても馴染みがなくて、分からない。違う言葉が分からるのは、人間も同じだけど

吉岡は一息、うーん、と唸つて、その棒と共に台所のシンク前に立つた。

「ちょっと洗うよ、べたつってるから君

「え、うわわ、あー……」

「それにしてもガシガシ君の当たりなんて初めて見たな。本当に当たり付きだつたんだ……どうだい、これでさっぱり、べたつきも無くなつた

「はわあ。気持ちよかったです」

「へ、そうなの」

「僕がもつと大きな体だった頃は、毎日のよつに上から、今みたいにザーッとした雨が降つてきたものですよ」

「スコールかな。今のは台所のシャワー栓だけもね

「今の雨はちょっと変な、ツンとする臭いがありましたけど、さつきまでのべたべた感が無くなつたので楽になりました。ありがとうございます」

ありがとうござります、と棒が言つた瞬間、その棒は淡く青い光を帯びた。

「おお、御赦光じやん。ガシガシ君、今なら君、天に昇れるよ。今的小さな体じや辛いでしょ？ 田もないし。もう一度、生命をやりなおしたら？」

「僕、ここに地に誰か終生語れる仲間がいる気がして、さつきからうずうずしてゐるんです。誰か僕と同じような運命の方はいないですか？」

「ヨモギコヌナビ……」

吉岡は、蔵の中の「ひぬやがた共を思ひ出して苦笑した。

「御赦光を得てなおこの地に留まりたつていうからには、誰か縁の人が物があるんだろうね。蔵に連れてつてあげるよ」

*

「おいやい、なんぞ懐かしい息を感じるぞい」

蔵の、さつき吹き上げられた将棋盤の『残照』が、声と共にがたがた揺れた。

「残照の爺さん、そんなに体揺らすと、ヒビ入るぜ」「そんなことより今、蔵の扉が開いたのと同じくして、遙か昔の懐かしい地の風を感じたんじや、なんぞ持つてあるのか良」
「ん？ ああ そう言えば、残照さんも目を切られてたんだっけ……アイスのバーつて分かる？」

「アイスキャンディーのことなら、戦前にもあつたで分かるぞ」「そうそう、そのアイスキャンディーの芯の棒が目覚めちゃつて、仲間がいる気がするとかいうから連れてきた」

「ん？！ もしやパンジャルミタ・サンシャデジヤールか！」

残照、と名乗っていた将棋盤が、一際大きな声音を上げた。

「声でかいよ、俺にしか聞こえないっても。他の奴らから苦情来るぜ、焼いちまえとか」

「そんなことはどうでもよい、その棒を、もれつと近くへ」
「はあ」

吉岡が残照に近づいた。
すると、手に持っている棒もまた、細かく振動するような素振りを見せた。

「ああ！ あなたは！」
「やはりお前か！」

物同士が声を上げる。

その一声を境に、吉岡の耳には、どこの言葉かよく分からぬ、訛つたような大きな話し声が轟いた。

「……ちょっとお一人さん、もう少し静かにやつてくれないか、蔵の中に響いて、俺の耳痛いんだけど」

「ん、ああ！ すまんすまん！ ここのはな、遙か昔に儂と並んで生えとつた奴なんじやよ、興奮せずにはいられまい！」

「だから残照さん、んなでかい声出さなくとも聞こえるって、て、え？ 同じ木なの？」

「そうじやそうじや、儂は切られてから乾燥させられる、人間の言う『寝かせ』の期間が長かつた木じやから、すっかりこの国の木のつもりじやが、本来は南蛮木じや。この形になつて、表面のところに塗りをしてもらつたのと、ずいぶん皆が磨いてくれたおかげでツヤも出たようじやが、元はそいつ同様に表面は荒いもんじやつた」「へえ。昔の職人の仕事は丁寧なもんで。それで、この棒とはどんなご関係で？」

「ライバル同士じやつたなあ、若い頃の話じや。儂は間伐とか言われるな、いわゆる間引きで、若いうちに切られてしまつたが、そなパンタは生き残つて今の世まで根を張つておつたか！」

再び興奮したように、残照の声が大きくなる。

「血管切れるゼジイサン、血管なんか無いけどや」「どうの昔に鋸で引き切られるとるわい、わっはっは」「おーおー、どこまで陽気になんだけホントに」「あの……」

本当に小声で、棒がささやいた。

「僕の水気拭いて、あの声の主の上に、置いてもらえませんか」「ええ、ダメダメ。まだ洗つたばかりで、拭つても水分たっぷり含んでるんだから」

「そこを何とか」

「うーん、まあ残照さんの天面、塗つてあるから大丈夫かな。おーい残照さん」

「おー！ なんじゃ ピリした！」

「こいつ乗せるぜ」

「つひやつ冷たい」

また何やら言つだらうと気構えていた吉岡だったが、冷たい、と言つた直後、蔵に全くの沈黙が訪れた。一分、二分と、さつきまでの喧嘩が嘘だつたかのような静けさが続く。吉岡は蔵の壁に寄りかかって、将棋盤の上に乗つているガシガシ君の棒、というおかしな構図を眺めた。

「そつか……そつかやつたか」

沈黙を静かに破つたのは、残照だった。そのまま続けた。

「良一よ、どうやら儂は、お前さんの孫と戯れる時間は、残されていないよ」

「へへ、どうこいつ」とよ

良一は不意を突かれ、壁から離れ将棋盤に駆け寄り、その前にしゃがみ込んだ。

「儂が天寿を全うすれば、さつき言つたが十一年と二ヶ月は将棋盤として生きられた。しかし今このパンタが上に乗つたことで、今日この時から天面に染みが出はじめ、それが大きくなつて木が朽ちる。十一週と一日で、儂は虫たちに粗方蝕まれる。その時が儂の寿命じやな、それより早く儂は戯から追い出され、燃えるゴミか粗大ゴミか、じやろうがの」

「ちょ、じゃ俺がこの棒つきれ乗せたのが、二百年の将棋盤捨てなきやならん原因作つちまつたのかよ?」

良一は手を伸ばし、ガシガシ君の棒を取ろうとした。

「いかんいかん、儂の運命はもう変わったのじや。たとえどんなに清潔にしようが消毒しようが、十一年と二ヶ月が十一週と一日に縮められたのは、もはや動かしがたいもの、儂はただそれを受け入れるだけじやで」

「おいおい、そんなこと言つたつてよ、じゃ、ものの二ヶ月で虫食いになるつて? それが分かつてゐだつたら、どこの消毒業者だつて呼ぶし何だつてするぜ、俺のお気に入りなんだから、あんたは「お気に入りだつたか? そりやありがたい言葉を死に際にもうつたもんじやい。あのな」

と、残照は一息置いてから、

「このパンタの魂は儂の兄弟魂だと、今触れあったことで分かつたんじや。根が繋がつておつたんじやろうな、それを人間が、表面に出ている上つの木だけを見て、儂が成熟しそうにもないからと、切り倒したんじやろう」

と言つた。

「兄弟魂だと、何かあるのかよ、ジイサン」

努めて冷静を装おうとしたが、良一の胸にはきつと締め付けられる感覚があつた。

「兄弟魂、というがな、実際は……あれじや、ベトナム戦争で人間が作り出した悲劇、ダイオキシンの、ほれ」

「ベトちゃん・ドクちゃんのことか？」

「そうそう、あの者らと同じじや。本来切り離されでは生きられんのだが、どういう訳か切り離された。だがあれらの者も、その実体は相当な無茶であつたろう、まだ儂を挟んで将棋談義をしてくれる相手がいた時に色々と聞いたわい。どちらがどうとか、その後どうなつたか儂は知らんが、仮に肉体をうまく切り張りしたのだとしても、もう片方は生物としての本質、すなわち魂を持ち得ないはずじや」

「まあ、確かに……どつちだつたか俺も記憶にないけども、一人はもう亡くなつたとか聞いた。片方は結婚して云々とか」

「それこそ、儂が目を失い『残照』を名乗るようになつたようなものじや。儂らのように動けない生物は、狙われるか否かに関わらず魂が宿る場所を傷つけられれば、その部分の機能を失う。儂であれば、光を失つた。一方、お前さん方のような柔軟な肉体を持つ生き物は、魂自体も柔軟に動けるだけの隙間、魂の逃げ場があるのじや

がな

「それが、ベトナムのことと、一体どう関係があるんだよ」

吉岡は、田の前に生まれた時からあつた将棋盤が朽ちる」と、
困惑が隠せないでいた。

「兄弟魂は、元々一つの魂じゃ。それが出会いと、溶け合つよつて
一つになる。そしてようやく、天に昇れるんじゃよ。まあ魂が後か
ら入ったような名品や、愛でられ続けて魂の座を得た物は話が別
なんじゃが、儂らのような雑多な物共は、そういう風にして材料の
時代の魂を持ちあわせ、朽ちるまでの間だけ、この世に縛られるの
じゃよ」

「残照さん、将棋盤としての生涯は嫌だつたのかよ。いつも嬉しそ
うに、自分が将棋盤である誇りを語つてたじやないか

吉岡は将棋盤にがつしりと手をかけ、そして上に乗るガシガシ君
の棒を睨んだ。

さつきまで、言葉と命の息吹を聞いたその棒からは、吉岡の耳に
何も届くものがなかつた。いつも見る、単なるガシガシ君の、ただ
しかし珍しいだけの、当たり棒だつた。

「まあ、年寄りの強がりと諦めじゃよ。木、というのは、金属を含
む石の類よりはマシじゃが、命が長いからの。人間のように自ら進
んで死を選び、下位の生命体に転生するなど」という離れ業も出来ん。
まあ少しでも早く新たな命へと生まれ直せることを、祝つてくれい、
良一やー

「そう言われても、な……」

吉岡はその場にへたりこむように腰を落とした。

力無く、ガシガシ君の棒を取る。そこには棒状に、随分古くから

あつたよつなシミがあつた。

「ああああ、本当にシミが出来てゐる」

「儂は嘘は言わん。正田の木は、そういう性格じやからの「これ、この部分だけくり貫いて……つて訳にもいかねえよなあ、将棋盤じやなくなつちまつし」

「くり貫いたつて運命は変わらんぞ。形ある物はいずれ朽ちる、それが少々早く訪れるだけじやて。そう氣を落とすな」

「朽ちる相手に言われても慰めになんねえよ……」

吉岡はシミの部分を眺めて、ため息を一つ吐いた。

「なんか俺、泣きそうだ」

「日本男児が泣いて良いのは、親を亡くしたときと駄布を落とした時だけじゃぞ？」

「ざけてんじやねえよ、生まれてからずっと一緒にいた、実の爺さんみたいな相手が亡くなるのに手の打ちようがないなんてよ、どう我慢すりやいいんだよ」

吉岡の田から、その言葉通り、大粒の涙がぽとつと、天面の角に落ちた。

その涙は、塗りが施してあるはずの残照の天面にスースと染み込み、また一つシミを作った。

「見てみよ、己が零すら染みになるのじや。木という生命としての命脈が、もはや絶たれたんじやよ。人間も諦めが肝心とか言つが、木も同様よ」

「そんな事言わないでくれよ、まだ立派な将棋盤じやねえかよお」

「将棋盤、か……そつじや、昔を思い出して、一局指すか」

「昔つて……俺が残照さんの言葉通りに指して、親父をぼろくそに

負かした、あの日のことか

「ああその通りじゃ。儂が相手になつてやる、飛車角に、桂馬まで落としてやつてやる。一一百有余年、儂の上で繰り広げられた板上の戦いも最後じゃ、一切手加減はせんから覚悟せい。ああ勿論駒はお主に動かしてもううんじやがなあ」

と、残照が笑つた。

「手加減抜きかよ」

と、吉岡はその腕で涙を拭つて、

「よしつ、残照のジイサン、あんたが根えあげるまで指し続けるからな、そつちも覚悟しろよ！」

「望むところじや、さあ駒を」

促された吉岡が駒箱を開け、残照の上に将棋駒を勢いよくばら撒いた。

(ア)

(後書き)

30本ノック、と題して、筆力向上のトレーニングをしております。是非コメントなど頂けたら、とても励みになり嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6339u/>

その声

2011年10月3日16時36分発行